

# アジアに届け！ 空飛ぶ車いすプロジェクト in Sri Lanka

## 参加者

神奈川工科大学 車いす修理屋「KWR」	梅原 直人	島野 克弥	高梨 裕光	池田 拓海	川満 太一郎
新潟医療福祉大学 義肢装具自立支援学科 「FWS」	上口 春菜	池田 愛	大村 夏純	井上 捷太	山口 泰平
	中野 雅之	栗栖 亜美	石川 由佳子	天井 仁美	柴田 恭介
韓国チーム	KIM YOU JN	KIM JIN SEOP	PARK JANG HYUN	KIM YOUNG SUL	

(敬称略・順不同)

## 日程

2014年

8月17日 10時：成田空港にて日本メンバー集合

9時間のフライト、2時間半の現地バス移動を経て、ホテルに到着

22時：ホテルにて韓国からの参加メンバーと合流し、夜中までミーティング

8月18日 終日：リッチモンド・キャッスルにて、現地の子供達と一緒に車いすの点検・修理



8月19日 午前：リッチモンド・キャッスルにて車いすの寄贈式後、カルタラ国立病院へ

17時：カルタラ国立病院にて車いすの寄贈式

8月20日 12時：障害者施設(SAMBODHI HOME VADDEGAMA)にて車いす寄贈・シーティング

14時：ヒッカドゥアのお寺にて車いす寄贈・シーティング

23時：スリランカのコロンボ空港から、帰路につく



今回はKWR(神奈川工科大学)、FWS(新潟医療福祉大学)の皆さんのレポートをお届けします。学生たちの素晴らしい活動内容にぜひご注目ください。日社済ではこれからも空飛ぶ車いす活動を支援していきます。

## 空飛ぶ車いす プロジェクト・スリランカ

KWR修理屋

### ・プロジェクトに見る背景

空飛ぶ車いすプロジェクトでは、これまでに25カ国・4000人以上の人々に車いすを寄贈してきました。また、様々な国を訪問し、現地での修理活動も行ってきました。その際、東南アジアの多くの国では車いすの製造台数自体が少ないために車いすが高価になってしまい、入手が困難となっている現状があります。それに加え、車いすを利用するための設備、故障した際の修理技術、利用者の車いすの扱い方等の「車いすを扱う環境」が整っていない事も車いすの普及を妨げているという事が判りました。そこで、ただ単に車いすを寄贈するだけではなく、現地より車いすに関する認識を深め、扱い方等の知識と修理技術の普及を促す必要もあると判断しました。KWR修理屋は、「空飛ぶ車いすプロジェクト・スリランカ」に参加して、車いすの修理を行い、車いすをより身近な物とする事を目標としました。

### ・フィッティング知識の伝達・車いす適合

スリランカでは車いすを使ったことのない人が大勢います。そのような人達にも車いすの正しいフィッティング知識を身につけてもらい、間違った車いすの使い方による骨の変形などの生活に支

障をきたすような副作用を防止するために必要な知識を実際に体験しながら覚えてもらう、いわゆる「車いす適合」も、前回からFWSが中心になり実施してきましたが、今回も重要な目標に設定しました。

### ・今後の展開

修理や適合など経験を積みデータを集め、今後諸外国で活動する際、どのような車いすを求めているのか、患者の症状の割合など、適合の参考になるようにしたいと考えています。従来の活動では、車いすの修理と寄贈のみを目的としていましたが、適合までを目的としたことで今後のプロジェクト活動の目的を大きく変えることができました。

私達が実際に車いすの適合を行うことで、利用者の今後の生活に支障をきたすような新たな病気を防止することができる。これにより、ただ単に車いすを寄贈するよりも、さらに意味のある「寄贈」ができるのではないかと考えました。

今後も利用者の属性と車いすの種類のデータを収集し、諸外国での活動において、現地で必要とされている車いすの種類や属性を認識することができそうです。

まだまだ、アジアもしくは世界では車いすを必要とする人がいる。私達が実際に現地へ赴き、直接利用者の車いすを適合することで、その方の生活を少しでもサポートすることが出来るのではと考えています。

## 昨年に続く海外ボランティア

FWS 井上 捷太

今年も、夏の海外ボランティアに参加、3泊4日のスリランカへの旅でした。今年は「現地の人々とのコミュニケーションを多く」という目標と



子供たちとは英語で会話することができました

「シーティングをより良くしたい」という目標を掲げました。全体的に振り返ると昨年より流れは良くありませんでしたが、その自分たちで考えて行動することができ、少しは成長できたと思います。一方まだまだ課題は多いと思います。今回は将来の自分のビジョンをよく考えることのできるよい機会でした。その為には今後はシーティング、人体の知識や語学勉強により力を加えて、より多くの人の笑顔を見ることができるよう頑張っていきたいと考えています。

## 身に染みた言葉の大切さ

FWS 山口 泰平

この写真は現地の子供と一緒に修理をしている様子です。子供の名前はイスルと言います。彼はとてもまじめで素直な子です。車椅子や車輪の仕組み、清掃方法等を教えると、彼は周りの子供たちを集めて、教え始めました。掃除の手順を教えると、どんどん覚え、分からない時は私にすかさず聞きます。殆どの事はジェスチャーや簡単な英語で教える事ができましたが、車輪軸の丁度いい調節具合を教える時「きつすぎず、ガタガタしない丁度いい占め加減」を教えることができなかった事が私の中の心残りです。もし自分の会話力がもっとと強ければ教えることができたと思います。また事前準備もできた筈です。海外活動には必ず自分自身が思わないような壁が多く、また得

るものも多くあります。その為、今回も多方面からの収穫が沢山あったので、行かなかった人たちに教えたいと思います。



イスルと一緒に修理

## この1枚を見て思い出すこと

FWS 栗栖 亜実

私はこの時、次々に変化する予定に頭を追いつかせ、声が震えるのを必死で抑えて、みんなを引っ張らなくちゃとそればかり考えていました。適合が始まり、私は全体を見て、指示やみんなのサポート役になるはずでした。でも現地の方に適合をして欲しいと言われ私しかいなかったなので私が適合をし、終わったと思ったたらまたすぐ他の人に捕まり……、その連続でした。その時の適合者数

は全体の3分の1も満たされているのかという状況だったと思います。閉会式が始まるので適合をやめる様、言って回りました。「え、もう？ まだ終われない！」という表情でした。

今回の想定外の事態を少しでも予想できていたら、もっと準備していればと自分の詰めの甘さに嫌気がさします。一緒に頑張ってくれた仲間、身体にあつていない車いすのまま帰ってしまった方々一人一人に謝りたいです。唯一の救いはチャレンジしたことを全力でこなそうと挑んでいたことです。臨機応変に対応できなくて結果は出なかったけれど頑張っていたと、心から思えます。でも本当に結果を出したかった！この1枚で色んな思いが一気に思い出されます。



この一枚を見て思い出すこと



## すべてが2倍、3倍

FWS 柴田 恭介

初めての海外活動となりました。「Thank you!」シーティングが終わるとどの利用者さんもこの言葉をかけてくださいました。普段いろいろな場面で感謝の言葉をもらっていますが、この時の言葉ほど鳥肌が立ち感動した言葉はありません。私たちが行ったシーティングは利用者さんに合う車いすを選び、フットサポートの高さを合わせ、必要であればクッションを入れるという作業のみです。このシーティングを行うために、私たちは勉強の合間を縫って事前学習をしていました。しかし、実際にシーティングの経験があるわけでもなく、まだまだ学ぶべきところも多くあった私たちは、当然のことながらプロがやっているそれとは質もはるかに劣り、ちゃんと合う車いすを提供できる自信はありません。現地では車いす自体が貴重なため、僕たちが車いすを渡すと本当に嬉しそうでした。自分たちのできる限りのことは全てやりつくしてきたつもりですが、利用者さんの笑顔を見ると悔しさと達成感や喜びが同時に生まれてきました。とても複雑な気持ちだったのを今でも鮮明に覚えています。今回の活動では、準備の段階から本当に深く考えて行ってきました。それ故、喜びや悔しさも倍でしたが、どちらも今後夢を追いつけるためのいい材料になりました。このプロジェクトは大学卒業後も関わって

いきたいと考えていますし、少しでも多くの人に知ってもらえたらと思います。

## 初の海外活動を通して

FWS 大村 夏純

初めての海外活動であり、初めての学外活動でした。時間の限られた中で患者さんに合う車いすを選び、さらに車いすの適合を行うということはとても大変なことでしたが、患者さんに喜んでもらえるように車いすを選び適合することを、とても嬉しく思いました。予期せぬ出来事が起こり、十分にシーティングの時間を設けることができず、悔しい思いもしました。

このように私たちの中では反省点が多くありましたが、車いすを受け取った患者さんは最後に笑顔で嬉しそうにしてもらったので、自分も嬉しくなり、この活動をしてよかったと思いました。決められた時間の中でやらなければならぬことが沢山あり、戸惑ってばかりで周りに迷惑ばかりかけたかもしれないです。ですが、そんな私にアドバ



嬉しそうな利用者さん

イスをくれたり、支えてくれたりと仲間の力をたくさん借りて今回の活動を終えることができました。今回の活動で、スリランカの多くの患者さんに車いすを届けることができ、この活動に参加できたことを嬉しく思います。これからは、今回のこの活動を活かしてより一層サークル活動に力を注ぎ、また空飛ぶ車いすプロジェクトに参加できれば良いと思っています。

## スリランカで気になったこと

FWS 池田 愛

最終日、車いすを受け取りに来ていた方の一人が、車いすでお寺まで来ていました。その方の車いすが、日本製の車いすとは作りが違いますがとても気になりました。

全体の形状はスポーツ用車いすに近いのですが、キャスターが普通の自走用車いすや介助用車いすは大車輪の前に2つずつ着いているのにこの車いすはフットサポートの中央から伸びた棒の先一か所だけに着いていました。スポーツ用車いす



スリランカで見た車いす

などは後ろに転倒防止用としてキャスターが着いているものもありますが、このように前にキャスターが1か所しか着いていないようなものは初めて見ました。このようなつくりだと、直進の際には問題ないように見えますが、左右に方向転換する際にキャスターが前の方に突き出ているので方向転換しづらいと思いました。残念ながら使用者の方に聞くことはできなかったのですが、これがスリランカ製なのか他国製なのかはわかりませんでした、普段私達が修理する車いすに比べ、とても頑丈に作られていたように見えました。

## 準備してきたことと現実

FWS 中野 雅之

3日目のお寺や障害者施設訪問の時には、クッションを車いすにつけ、利用者の方と話すことが出来ました。一方、クッションの設置方法を正しく教えることが出来なかった等、多くの課題が見つかりましたが、初めてこのクッションを喜んでもらった気がしました。自分の手をとって笑顔で話しかけてくれる姿は今でも忘れられず、今まで苦勞してきたことなど吹き飛ばすくらいの笑顔でありました。

今回は私にとって2回目の海外活動でありFWSとして初めて適合用にクッションを持っていく取り組みをしましたが、新しい事をした結果、課題が去年よりも多く残った活動となりました。

た。しかし昨年の活動に比べると成長を実感することが出来ました。利用者の方とコミュニケーションを積極的にとることが出来たり、反省点を活かして次に繋げることが出来たりなどプロジェクトメンバーで成長を確認することが出来たと私は思います。この活動は多くのことを学ぶことが出来るボランティアをする側の私達を成長させてくれる。そんなこのプロジェクトに恩返し出来るくらいに活躍し、車いすを通してこれからも自分を高め、届けていける様に精進していきたいと思います。



利用者の方と会話ができました

## 車いすを通して私たちに今できること

FWS 天井 仁美

今回で2回目となる海外活動の参加を決意した時から昨年の反省がどれだけ活かせるだろうかという不安と、今年は現地でどんなことができるのかという大きな期待があった。活動を通してFWSには少しずつ成長がみられている。この成

長が活動の発展を築いていくことを常に意識し、日々、サークルに参加していきたいと感じる。また多くの方にこの活動を知っていただき、世界の社会福祉に目を向けていただきたい。世界の社会福祉が潤わなければこの活動に終わりはない。これからも我々ができることは何か。精一杯見つけて、行動をしていきたい。この写真は車いすを贈呈する前の利用者さん達である。車いすを初めて見る人が多いことだろう。そして車いすをもらえるという嬉しい気持ちを持つ人が多いと思う。しかし全ての人が嬉しい気持ちで待っているわけではない。1台の車いすをもらうために、何時間もかけて来る人がある。そんな大変な思いをして受けとる方々が多くいることは、我々の大きな課題の一つを物語っている。



寄贈式会場で車いすを待つ利用者